部屋のスイッチを押せば明かりがつく。蛇口をひねれば水が出る。
大井川は、わたしたちの気が付かないところで人々の暮らしを支えている―。
もしも大井川がなかったら、わたしたちの暮らしはどうなっているのだろう。
そのとき、この地に人は住めるのだろうか…。

本特集では、１月25日に開かれた大井川流域シンポジウムの模様を振り返りながら「後世に残したい大井川の姿」とはどんな姿か、また「そのために何が必要か」を考えてみた。この町よりずっと古い歴史を持つ大井川。２時間や３時間の討論で、すべてを語り尽くせるほど小さなテーマではない。古くはこの地の林業を支え、今も生活のあらゆる場面を支えてくれている。昔に比べて少なくなったとはいえ、夏になれば川で遊ぶ子どもたちの声がこだまし、アユ釣りシーズンには、太公望の竿がずらりと並ぶ光景が見られる。昔から受け継がれてきた地域の伝統行事も根強く残っている。人々の憩いの場として、今もなお大切な存在であることに変わりはない。

大井川を考える上で最も重要なことは、こうしたシンポジウムなどを通して、大井川の未来を考え続けること。そして「大井川」という存在の大切さを、人々の意識から消してしまわないことだ。

矢作川の事例を報告した洲崎主任研究員は「まず地元の人たちが、自分に何ができるのか考え、そして実行することが肝心。その積み重ねが、やがて大きな輪となっていく。矢作川では、流域が一つになろうという住民の思いが、川再生の原動力だった」と話した。

矢作川の例に見るまでもなく、大井川にもさまざまな住民運動、河川保護活動が展開されている。こういった取り組みの一つ一つは大きなものではないかもしれない。しかし、何もしないところからは何も生まれない。意識のないところには変化も生まれない。小さな運動がきっかけとなり、やがて大きな広がりを見せ、川を守る力になるということを、矢作川の事例は教えてくれている。

先に書いたように、「後世に残したい大井川の姿」というテーマは、簡単にその答えを導き出せるものではない。川本来の姿を考えれば、水を満面とたたえている姿が理想だ。しかし取水をやめてしまえば、わたしたちの暮らしが成り立たなくなるのも確かだ。「水利用」と「環境保全」。双方の視点から、妥協点を探し続けなければならない。

ある人が、「昔の人は、川の恵みにいつも感謝していたんだよ」と教えてくれた。生活が便利に豊かになった現代では、川のありがたみを感じることは少ないかもしれない。でも、一度想像してみてほしい。「もしも、この地に大井川がなかったら―」と。

わたしたちの部屋の蛍光灯は、明かりがともるだろうか。この地の誇り「川根茶」を育てることができるだろうか。下流域の人々が飲む水は、どこから供給されるのだろうか。人々に安らぎや癒やしを与えてくれる「水辺環境」は、どこにあるのだろうか。そもそもこの地に、人が住み続けられるのだろうか―。

とても無関心ではいられない。

大井川は「母なる川」。わたしたちの暮らしを豊かにする。包み込むようなやさしさで、見守ってくれている。今度はわたしたち自身の手で、大井川を守ることを考えてみたい。「後世に残したい大井川の姿」について考えてみたい。

―後世に残したい大井川の姿　終

接岨湖湖畔に完成した遊歩道「八橋小道ラブロマンスロード（接岨）」を楽しそうにハイキングする人々。川は人に、安らぎと癒やし、楽しさも与えてくれる。身近に存在するからこそ、無関心ではいられない問題だ。